

糸電話

教育相談課だより
平成30年12月3日
第11号



「逐語記録をとる」ということ ～教育相談(中級)研修講座～

11月2日に教育相談(中級)研修講座が2日間の日程を終えました。中級では、第1日(今年は7月6日に実施)を受講した後、学校で教育相談を行い、逐語記録を作成し、第2日にそれを持参して研修をします。逐語記録を作成するには、相談者(保護者や児童生徒)に説明をし、了承が必要になります。深刻な相談内容で作成するのではなく、自分の話の聴き方を振り返られるもので十分です。それでは、中級受講者の感想をご紹介します。

逐語記録は書くことも聴くことも苦しかった。でも、自分を見つめ直すことができたように思う。

今回の講座を申し込んだことを後悔していたが、実際受けてみると楽しかったし、有意義であった。

反省点ばかりが多く、逐語記録を持参することが憂鬱だったが、協議を通してどうすればよいのかが分かってよかった。

実践を伴う研修が一番身に付くと思うが、録音については理解を得ることが難しい。

逐語記録の作成に抵抗がある先生もいます。また、普段でさえ忙しい校務の中、時間を割いて録音を起こして作成される先生もいます。そのような状況を分かっているにも、教育相談の研修においてなぜ逐語記録をお願いするのか。その理由は次の感想にあります。そして、受講された方がその意義を一番実感しています。

逐語記録を作成することで、自分が「できていたつもりだったこと」が分かった。

逐語記録の検討を通し、自分の面接をしっかりと振り返り、反省することができた。話し方や問の取り方の癖などを客観的に見ることができた。

逐語記録をとり、反省の思いで一杯であったが、褒めてもらった部分があり、話の聴き方についての自分の考えを改められた。

子供とのやりとりを文字に起こすと、気持ちの揺れや動きをよく確かめることができた。また、自分が気付かない間に子供を傷付けていることもあると思うようになり、考えて言葉を使いたいと思った。

実際に自分の録音を聞いてもらうのは恥ずかしかったが、多くの人にアドバイスをもらい、たくさんの学びがあった。また、他の方の録音を聞くことで、自分にはなかった視点に気付くことができた。

自分ではできていないと思っていたところができていたり、頭で分かっていたもできていなかったりしたところがはっきりと分かったことで、もっと話をよく聞けるようになりたいと改めて思った。

高校では相談をしていた生徒が退学してしまうことがあること、小学校では一緒に折り紙を折りながら相談を聞くこともあることなどを協議で知って、校種を超えた学びができた。

逐語記録を作り、検討することは、自分と向き合うことだと思った。

教育相談研修講座は、初級(2日間)、中級(2日間)、上級(3日間)の7日間の研修で、相談に必要な技法を研修します。初めは「技法を学びたい」「もっと上を目指したい」といった、自身のスキルアップを主とした感想が多いです。もちろん、技法を学び、レベルアップしたいと思う心は、子供たちと寄り添いたいという気持ちがあるからです。

しかし、研修を生かし、学校で行った教育相談を逐語記録にし、再びセンターで検討をする中で、次第にその感想が「その子が話したいことを聴くことに徹したい。」「技法ではなく、聴く態度を意識して気持ちに寄り添うことを大切にしたい。」「生徒の悩みを受け止め、前を向ける手助けができるようになりたい。」という表現に変わってきます。

教育相談課が行う研修は、ロールプレイや演習を通して実践的に研修してもらうことが多く、この逐語記録を持ち寄ることもその一つです。苦手意識をもっている先生もいるかもしれませんが、前述の感想のように、講義を聴くだけでは得られない学びがあります。学校における教育相談体制づくりが今、求められています。「児童生徒の教育相談の充実について(通知)」平成29年2月文部科学省教育相談研修講座を受講される先生方に役立つ内容を今後も検討し、研修に取り入れていきたいと思っております。

